

PDF化の為、原版とはレイアウト等で多少の変更があります。

福山大学
図書館報Library Announcement,
Fukuyama University第3号
2005.09

<目次>

教育について — 「二十四の瞳」の世界	片岡俊郎	1
図書館に期待すること	青野篤子	2
生きる力をつけるための読書	佐藤理恵	4
図書館でのインターンシップを経験して インターンシップについて	川崎晶裕	6
福山大学附属図書館で学んだ事	山成一世	6
EUを学ぼう！～EU資料展を終えて～		7
図書館からのお知らせ 個人情報 の 取 組 み に つ い て		8
薬学部分館からのお祝い		9

教育について
「二十四の瞳」の世界福山大学附属図書館長
経済学部経済学科教授 片岡俊郎

木下恵介（1912～1998年）の映画「二十四の瞳」（1954年）は、壺井栄（1899～1967年）の同名の小説を原作にしている。小説『二十四の瞳』は、1952（昭和27）年に発表されている。木下恵介の映画は、2005（平成17）年1月、3月、5月、7月、9月、11月にDVD-BOXで第1集から第6集まで発売され、木下恵介の全作品が茶の間で見られるようになる。

「二十四の瞳」は、瀬戸内海の一寒村の岬の分教場に赴任した、学校出たての女教師と十二人の生徒との物語であり、時代的背景は、1928（昭和3）年から戦後にかけてである。分教場での、先生と十二人の生徒との交わりは、小学校1年生の春から秋にかけてであり、十二人の生徒と再会するのは、本校での5年生からである。女教師は、生徒を6年生まで教えた上で退職する。戦後、復帰し、分教場の教師として、教え子の子供達を

教育することになる。復帰に際し、教え子達は、先生の歓迎会を催し、戦死した3人の男子生徒、病死した1人、不明の1人の女子生徒以外の男子生徒2人、女子生徒5人の7人が先生と再会する。

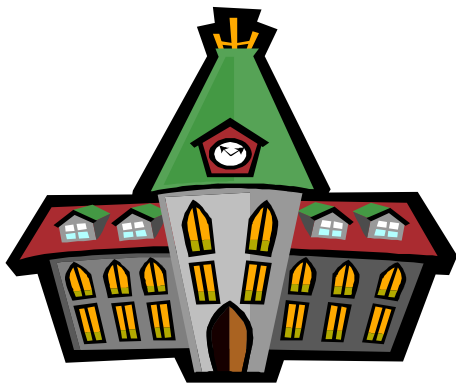
最初に赴任した大石先生のあだ名は、小石先生、再就職した大石先生のあだ名は、泣きみそ先生である。小石先生の素晴らしさは、小学校1年生と同じ目線で生徒に接することであり、同じ目線であるが故に、十二人の生徒から学ぶことができたのである。大石先生ではなく、小石先生であるが故に、学ぶことは教えること、教えることは学ぶことを実践できたのである。一方、泣きみそ先生では、知的対応と情緒的対応、両者合わせて生徒に接しなければならぬ小学校教師にとって、情緒にひたる泣きみそ先生では、一抹の不安を、自身だけではなく、われわれにも感じさせるのである。



大石先生が、十二人の生徒に慕われた理由は、あだ名、小石先生の中に読み取ることができる。

大石先生の生徒に対する接し方は、戦前、わが国の貧しさの中、正常な親子、夫と妻の関係が保証されない社会で、親子、夫と妻の関係で欠けている部分に入り込み、誠心誠意尽くすことから先生と生徒、師と弟の信頼関係を作り出すのである。戦死した男子生徒3人に対しては、戦争に対する疑問をぶつけはするが、社会の風潮は先生の教えるを無効にする。病死する女生徒に対しては、見舞いで励ますことしかできず、先生の願いは届かない。不明の女生徒に対しては、村一番の名家も時代の波に翻弄^{ほんろう}され、その中で、名家の子供はひたすら生きようとしても、子供の思い通りにはならず、先生においても介入の余地はない。さらにまた、歌手志望の料理屋の女生徒に対しては、親子の意向を両者から聞くが、大石先生は本人の希望を満たすことはできない。

大石先生にとって、問題点の所在が明らかであっても、問題解決の能力は読み取れない。



戦後、わが国の豊かさの中で、福山大学の一教師である私が、学生にどのように接しているかを考えてみた。

私は、大学の講義において、現実をタテマエとウソで成り立つ社会と捉え、戦争のない平和な社会を築くためには、タテマエでマコトを語ることに満足せず、ホンネでマコトを語ることの難しさを理解させた上で、真理を追求する必要性

を説く。学問をすることは、知的対応を身に着けることであり、知的対応を身に着けるためには、無私無欲に加え、無心、即ちあらゆる考え方から自由であることにより、真理が創造できると説く。世界の中で、一人一人の個人の果たす役割が重要であり、自由の中で、一人一人の個人としての自立が、平和を築くことにつながると説く。

私は、大学の演習（ゼミ）において、福祉・医療に重きを置く現実の風潮に対し、保健の重要性を、薬を例えに「」（フタ）を取れば「楽」（らく）になるという薬学、医学的思考方に、クスリの逆はリスク（危険）であるという社会科学적인見方を示し、緊張感を伴う日常生活の積み重ねが、健康を作り、前記、個人としての自立を加えることにより、福祉・医療に対しても一定の距離が置けると説く。

私は、大学の就職指導において、大企業だけが企業ではなく、中小零細企業への目配りの必要性を説き、一人一企業の時代が到来していることを認識させ、サラリーマン根性から企業家精神まで幅広く身に着ける方策を示している。また、保証人との懇談の中で、本人の希望に沿えるよう、本人と保証人との接点を見出すよう努力している。

以上考えてきて、福山大学には、現代の「二十四の瞳」の世界があるように思う。

図書館に期待すること

人間文化学部心理学科教授 青野篤子



今、図書館の機能は大きく変わろうとしている。いや変革を迫られていると言えよう。情報

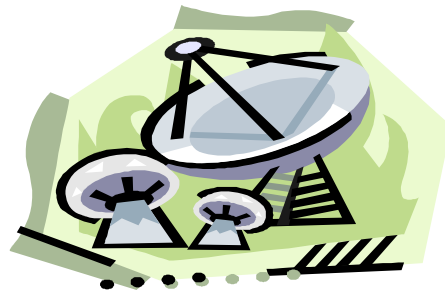
化社会が進展し、私たちは、本・雑誌・

新聞など活字になったものだけでなく、インターネットや映像・音声によって伝達される情報、つまりマルチ・メディアから多くの情報を得るようになった。この大きな流れはもはや止めようがなく、若い人たちの情報収集の方法は活字媒体よりも電子媒体に大きく依存していると言えよう。

かくいう私もこの 4 月から単身赴任を始め、主に節約を理由にインターネットで新聞を読むようになった。慣れない頃は、新聞を読んでいると感じがなく、全部チェックしなければいけないような強迫観念に駆られ、何か情報に振り回されているような気がした。しかし、しばらくすると興味のない見出しは読みとばせるようになり、逆に必要な情報は過去にさかのぼって検索することもできるメリットにも気づくことができた。講義や本のネタにするのに新聞の切抜きは欠かせない作業だが、今日では、高い新聞購読料を払わなくても効率的に行えるようになったわけである。

図書館は大学にとって情報の集積地であり、情報の発信基地である。当然、時代の変化に対応して、その機能や役割というものを考えていかなければいけないのではなかろうか。その点、本学の図書館は対応が遅れているというのが実感である。一例をあげると、日本で最大の学術情報ネットワークである国立情報学研究所の「CiNii (サイニイ) : 論文情報ナビゲータ」に機関登録をしていないために、オンラインで必要な情報が得ることができない。また、今後研究紀要の内容を掲載することになれば、こちらから情報発信はするが、受ける情報は不十分というアンバランスが生じることになる。学生に情報リテラシーを身につけさせ、専門をしっかり学ばせるための条件整備を進める意味でも、地方大学であることによる種々のハンディを補う意味でも、図書館の情報化を今一歩進めていただきたいと思う。かと言って、

本や雑誌、新聞などの活字媒体がもはや重要でないということではない。やはり活字になったものにはそれなりの良さがあり、別の役割がある。電子メディアが最新の情報を運んでくれるのに対して、活字になったものは、長い時間をかけて熟成された人々の思考や知識の宝庫と言ってもよいものである。先達の知恵や学問の成果というものは、やはり手にとり、彼女ら彼らの顔を思い浮かべ、対話をしながら読むのである。また、たとえば電車に乗って新聞を読みたいときに、わざわざノートパソコンを開けたりはしたくない。やはり紙ベースの新聞がよい。また、研究に必要な文献を探すのにデータベースの利用はたいへん便利ではあるが、検索条件からこぼれた情報や研究の新しいテーマを見つけるためには、雑誌のバックナンバーを手にとって見る必要がある。



したがって、図書館としては、従来どおりの蔵書や活字媒体を増やすという目標をもちながらも、時代に対応した情報化・電子メディア化を進めなければいけないという難しい問題に直面しているのだと言えよう。

次に図書館に期待したいのは、もっと多くの学生や教職員が利用する図書館であってほしいということである。今は、大学の規模からして、学生や教職員の利用があまりにも少ないような印象を受ける。この原因を考えて、より開かれた図書館にしていく必要があるのではないだろうか。

大学も今や一種のサービス産業であると言っても言い過ぎではないだろう。学生に対するサービスが問われる時代

である。サービスとは、手取り足取り学生を甘やかすということではなく、必要な情報や援助を提供することであり、何よりも学生に対するホスピタリティ（もてなし）の気持ちをもつことではないだろうか。図書館も、このホスピタリティの気持ちを大切にしてほしい。具体的には、学生や教職員対象の利用案内の充実、オリエンテーションの徹底、時宜を得たテーマによる企画展示などが考えられる。また教員は、自分の研究が事足りればそれでよいというのではなく、学生の視点にたって、図書館の現状というものを見直してみる必要がある。

図書館を取り巻く物理的環境やアメニティも重要な問題であろう。図書館のある 15 号館のみならず、本学ではあちこちに段差があり、車椅子での移動はおろか、だれにとっても移動しにくい環境となっている。図書館はあらゆる学部の学生・教職員が利用する場所であるので、どこからでも容易にアクセスできるのが理想である。大学は人と人が出会うコミュニティである。図書館はその中核的な役割を果たすことが期待される。



生きる力をつけるための読書

学務部学生課職員 佐藤理恵

なぜ、本を読むことが大切なのか？インターネットの隆盛により若者の「活字離れ」が危惧されている。一方的な情報受信は進んでいるが、コミュニケーション

ン能力の低下が問題となっている。私も大学事務職員として学生対応窓口（教務課、学生課、就職課、留学生担当等）の各部署を経験する中で、様々な個性ある学生と接し、日々学生対応の難しさを痛切に感じている。学生と相互理解を深めるには、特に対話とレスポンス（応答）が重要だ。そこで他人を理解していくためには、読書経験によって得られる様々な知恵や思考力、想像力の必要性を感じている。しかし、読書を毎日の生活習慣に取り入れるまでには、かなりの訓練が必要で、私自身もまだ読書が習慣化しているとは言い難い。



少し前に『読書力』（齋藤孝著、岩波新書、2002年）等で三色ボールペンを利用した本の読み方、トレーニング方法が話題になったが、私も大学時代、先生に同様な本の読み方を伝授頂いた。鉛筆を手に著書の主張（客観的な要約）と自分の琴線に触れた（主観的な重要）部分に線を引く、後で読み返す、気に入ったフレーズはメモを取る、そんなトレーニングを続けた。先生は毎回講義の始めに2,3冊の書籍を紹介されたが、主に新書系の本が多かったため、自然科学系の新書が私の読解力と文章作成能力のトレーニングの教材になった。また、講義で紹介された書籍をすぐにフィードバックするために、学内の附属図書館へ走った。図書館は、主に課題図書を読むためやレポート作成のために利用したが、4年生になると卒業論文のための資料収集に通い、その際図書館司書の方にアドバイスを頂いて、効率よく欲しい情報が入手できた。最近はコンピュータにより、各自がパソコン画面で図書を検索閲覧できるが、人的な対面方式の検索は、司書の方の持っている知識が加わりブラ

ス α のアイデアを頂ける。この点は、図書館利用の大きなメリットだった。大学時代は、図書館は緊張感をもって臨む「読み」「書き」の知的トレーニングの場所だった。

これらの経験から学んだことは、本から得た情報や知識は自分の世界を広げ、「読む」作業は、相手の話をしっかりと聴く力と話の脈絡をつかむ力を付け、語彙力を補強し、自分の意思を言語化できる力を付けてくれるということだ。自分の意思を伝えるために自分の言葉で表現することは、自らが生きていくための力だ。何も無いところから独創性を生み出すことは難しいが、まずは自分と共有できる著書の考えを再構築する訓練を始め、次は自分のジャンルに置き換えて自分の意思を活字で表現してみる。そして自分とは違う感性や考え方を持つ人に出会っても、拒絶するのではなく、向き合い対話ができるように努力していくことが社会生活で大切だ。自分と同じ意見のみに限らず、多種多様な本を幅広く読むことにより、思考力や想像力を養い、他人の気持ちを理解できるようになる。例えば小学生の頃、田中正造の伝記を読み正義感に感銘を受けたこと、最近では、池波正太郎の剣豪小説の義理と人情に触れ心熱くなったことや、江國香織や唯川恵などの恋愛小説で疲れた心が元気になったりした経験がある。そして著者(他人)の経験を通して追体験を行うこと自体が重要なのではなく、その意味

を涵養して、明日の生活に生かしていくことが大切だ。自分と向き合う時間を持つことが読書にある。私は先の見えない将来に不安を感じている。だからこそ自分は何のために生きているのか、自分の人生に意味を見出すためにも、自己表現の方法の手段として言語化することは重要で、自己形成には読書を習慣化することが必要だと思う。

私は、人生とは多々起こる予期せぬトラブルについて冷静に事実を客観視し、自ら主観的な判断を行い、その壁を乗り越えていく努力の連続だと思っている。努力をやめればそこで終わりだ。自分を肯定するところから生きる力が生まれる。自分を鍛え、より良く生きていくために読書のトレーニングを続けていきたい。学生の皆さん、携帯電話と共に本も携帯して、限られた学生生活を有意義に過ごして欲しい。



図書館でのインターンシップを経験して

今年度図書館では、初めてインターンシップを受け入れました。インターンシップとは数年前から言われ始めたまだ目新しい言葉で、希望する職業を一時的に体験してみようという試みのことであり、将来目指す職業を決める手助けにもなります。この度、本学図書館では2名の希望者を平成17年8月17日(水)～平成17年8月25日(木)の間受け入れ指導しました。蔵書点検等で十分な対応が取れず、申し訳ないことをしましたが、参加した2名の感想を掲載します。

「インターンシップについて」



初めに何故インターンシップを体験してみようかと思ったのは、自分自身が仕事に対して無知だったという点があります。アルバイトはしていたのですが、インターンシップとそれとは、やはり何か違うものがあるのではないかと思えたからです。それは仕事内容であったり、それに臨む態度であったりというものです。また、一回でもそれを体験しておけば次にまた受ける時に冷静に対応できると思ったからです。

今回、私は福山大学附属図書館の様々な業務、今回は閲覧業務、整理業務、受入業務などをやりましたが、閲覧業務は主にカウンター周り、書架整理などであり、整理業務は主に図書の修理や入力業務、受入業務もデータ入力などでした。どこの業務もまったく違うことをしているのでとても大変でした。図書館のインターンシップは図書館とはどのような所かというのを知るにはとてもよいものだと思います。少しでも興味があるならお勧めです。

人間文化学部心理学科 3 年 川崎 晶裕



「福山大学附属図書館で学んだ事」



私は 7 日間福山大学附属図書館で業務を教えていただいた。図書館は本館と薬学部分館に分かれておりさらに本館は整理課、閲覧課、図書課に分かれていた。

最初に図書館の管轄の場所を案内しながら図書館業務の概要説明をしてくれた。次に附属図書館薬学部分館で実習した。分館で利用の仕方が大きく違う事2人で全ての業務をこなしている事に驚いた。3番目に本館の整理課で本のラベル貼り、データ入力、本の修理をした。4番目には閲覧課でカウンター、雑誌を棚に並べた。最後は図書課で新刊のデータ入力とラベルを貼り、判を押した。意見交換をして職員の方々から貴重な意見を頂き、メモを取る、解らない事は質問する、確実に仕事をこなす事が重要だと教わった。教わる時は何が大切か、教える立場に立った時何を重要視すれば良いか、どんな職業に就きたいかも知ることが出来た。これからもインターンシップ受け入れ先になり学生の育成をしてほしいと思う。

蔵書点検中のお忙しい中、時間を割いてご指導してくださって誠にありがとうございました。

経済学部経済学科2年 山成一世

EU を学ぼう！ ～EU 資料展を終えて～

2005年5月23日(月)～27日(金)の5日間、「EUを学ぼう」をテーマに図書館でEU資料展を行いました。

本学とEUの関わり

欧州委員会はEU公式資料や、各政策分野についての広報資料を所蔵するEU資料センター(EDC)と委託図書館(DEP)を世界中に設置しています。日本国内には19校の大学にEDC、国立国会図書館にDEPがあり、中国地方唯一のEDCは1985年、福山大学附属図書館に設置されました。



2005年日・EUフレンドシップウィーク

日・EUフレンドシップウィークは、毎年5月9日の「ヨーロッパ・デー」を中心に開催され、今年で5回目となります。文化、学術、スポーツなどの催しを通して、日本と欧州連合(EU)の交流を図ることが目的で、今回行われたEU資料展もこの一環です。



EUを学ぼう

EDCとして図書館での催しは、今回初めてであり、分かりやすく伝えたいという思いから「EUを学ぼう」をテーマに決定しました。図書館での5日間の資料展示と、経済学部との共催で国際経済学科高田雄司教授による講演「拡大EUと企業の経営戦略」を行いました。資料展への来場者は約250名、講演聴講者は約350名と、大盛況のうちを終了することができました。本学の学生、教

員だけでなく一般の方にもたくさんご来場いただき、資料展でクイズ正解者にプレゼントする EU グッズも好評でした。クイズに解答する事で、EU の事を少しでも知っていただけたのではないかと思います。

福山大学 EDC

図書館では EDC として多数の EU 資料を所蔵しています。資料展は終わりましたが、無料のパンフレットや資料等もたくさん用意しています。EU について研究している方だけでなく、EU 加盟国に興味がある方、旅行を考えている方、是非福山大学 EDC を訪ねてください。ご利用お待ちしております。

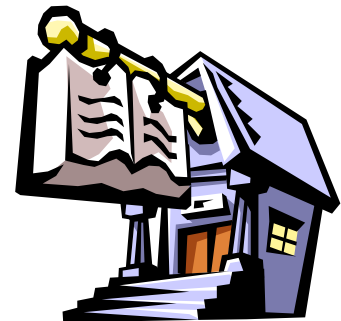


最後になりましたが、EU 資料展に際し、ご協力いただいた皆様、ご来場いただいた皆様本当にありがとうございました。

*** 図書館からのお知らせ ***

★★★★個人情報取組について★★★★

今年 4 月以降、今まで聞いたことのなかった「個人情報保護法」といった言葉が、あちら此方で喧かれる様になりました。これは、「組織の皆さん、あなたがたが活動していく上で所有している住所・氏名・連絡先・生年月日・家族構成等に関するデータの取扱いが、おろそかになっていませんか。皆さん気を引き締めて取扱ってください。もし、個人データをその人の許可無く漏らしたり、いい加減に扱ったならば、記載されている人のプライバシーを侵害することになるので法律で厳しく罰します。」といったものです。いいかえれば、本人の知らないところで勝手に出回る個人データ（情報）の根底に規制をかけ、個人の人権を法律で守ってあげましょうということです。



図書館で一例としてあげれば、「返却督促一覧表」や、「〇〇利用一覧表、〇〇申込一覧表」等がそれに該当します。掲示もしくは利用申込み時に自分の名前を記入することで、他人が容易に自分の事を知る事が出来るものがそれに当ります。

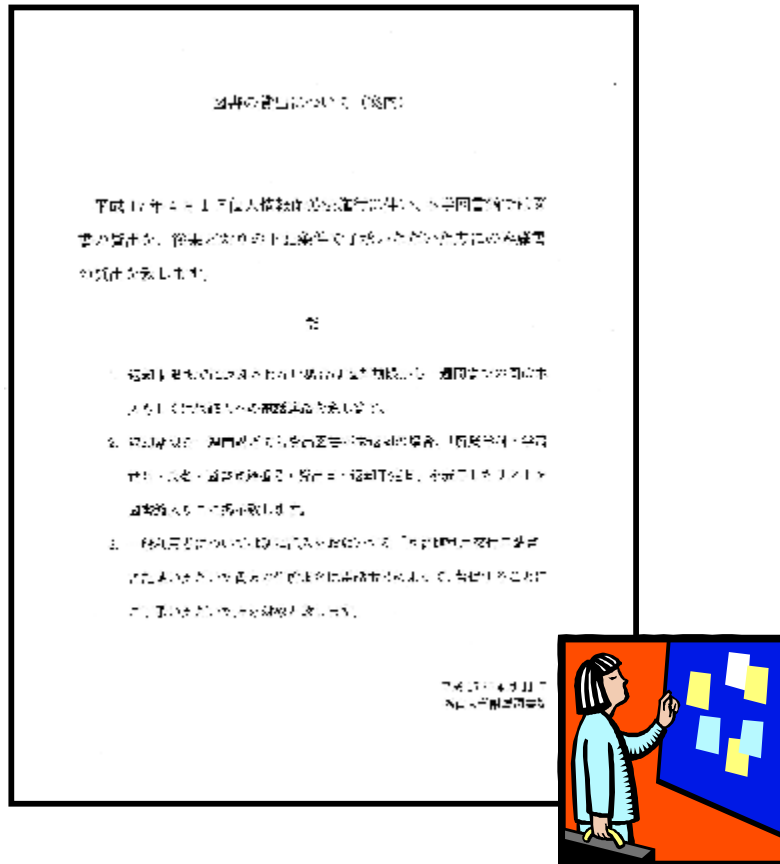


勿論、未返却督促一覧についてもそうです。以前は①学生番号と図書番号を一覧にして貼り出し、それでも返却がない場合には、②電話での督促という順番で返却してもらっていましたが、4 月以降はこれを変更し①電話での督促を先に行い、それでも返却されない場合には②従来通りリストを作成して掲示しています。もちろんこの事に同意できない人には、下記の掲示物のとおり、図書の貸出はできません。（2005 年 4 月 館内掲示済）

なお、従来よく見かけていた「〇〇一覧表、申込表等」は一行ずつ簡条書きになっている用紙の事で、これに記入することにより利用申請可能な書類です。しかしこの形式にも問題があります。後から来た人が前に申し込んだ人の情報を見ることが可能となるからです。よって、全て「XXXX 票」といった単票（一枚で使い切りタイプのもの）に変更し、その都度カウンターに提出していただくようになりました。もちろん、申し込まれた後の書類については、法に触れないように図書館で厳重に管理し、責任持って処分します。

また、図書館に所蔵している資料の中に個人が特定できる資料もあります。例えば卒業アルバム、市販されていない名簿等があります。こういった本もその対象とみなされます。従ってこういった本の閲覧は制限いたします。

学内だけでも他にこのような書類が一杯あると思われます。この法律では親であろうと第三者として扱っています。個人のデータの大切さを身にしみて感じるいい機会だと思いますので、自分の周りを見つめなおしてみましょう。



★★★★薬学部分館からのお願い★★★★

2005年6月より、分館では図書の持込について変更があります。分館の図書と区別をつけるため、持込図書は1冊につき1枚、カウンターでお渡しする「しおり」を挟んで下さい。持込図書とは、私物の本や教科書、図書館の貸出手続済みの図書等です。「しおり」は退館前にカウンターに返却して下さい。ご協力よろしくお願ひします。

退出時にカウンターに返却してください



青野山

作家、森鷗外（1862～1922年）の故郷、津和野の町と、青野山の存在とは切り離せない。

JR津和野駅前から、あるいは津和野城跡からの青野山の眺めは素晴らしい。写真は、太鼓谷稲成神社本殿前から青野山を撮ったものである。

鷗外が父に従い上京するのは、10歳の時である。鷗外の有名な遺言「余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス」の背後には、10歳まで過ごした津和野の町の風景、青野山と、津和野の町の人々が「無私、無欲、無心」になりきれず、尊崇する太鼓谷稲成神社の存在があるように思う。（K）

編集後記

福山大学図書館報第3号ができました。依頼した原稿も、大学としての機能方法⇒学内図書館としての機能方法⇒図書館の活用方法等についての一連の記事として掲載することができ、ホッと $\circ(*^{\wedge}\nabla^{\wedge}*)\circ$ しています。なかでも「図書館に期待する事」の記事において、幸いにも今の図書館にとって「耳の痛い」声を聞くことができ、大いなる刺激を受けました。今後こういった意見を素直に取り入れ、図書館を皆さんに受け入れてもらえるよう努力したいと思います。また学生の皆さんも、こういった要望を図書館に備え付けの「利用者の声」のボックスに入れて意見を聞かせてください。

また、執筆者については、お忙しい中執筆を快くお引き受けくださりありがとうございました。編集担当(桑田・明石) $\vee(*^{\wedge}\nabla^{\wedge}*)$

2005年12月1日発行

編集・発行 福山大学附属図書館

〒729-0292 広島県福山市学園町1番地三蔵

<http://libexp.fulib.fukuyama-u.ac.jp/>

印刷 三原プリント株式会社

〒729-0041 広島県三原市和田町6483